



この里村邸のテーマは「ウエストコースト」。海まで車で5分という立地の良さと、建物全体のテイストがマッチしています。



ご主人の昔からの趣味であるスキムボード。ファッションやインテリアなども互いに少しずつ影響して、最近ではアメリカのサーフっぽいテイストが気分なんだとか。もちろん家づくりにとっても重要なファクターとなっています。



海まで車で5分。二人の生活に海は当たり前にあるものだそうです。



デッキにはハンモックをかけてリラックスタイム。雪が降ると使えなくなるが、雪の降ったデッキもまた景色としては気に入っているのだそう。

Design for around life.
Green HOUSE SHIMIZU

ウエストコーストな アメリカンスタイル

photo MASAKAZU kato (TEXFARM INC.) text MASAHIKO watanabe

子どもの頃からずっと、海で遊ぶのが好きで、海の近くで暮らしている。

プロデューサー・清水さん（以下敬称略）お会いして1年以内で完成しましたね。

ご主人 本格的に動き始めたのは2016年3月。まず最初にやったのは、良いと思うメーカーの情報収集を夫婦別行動でするところから。で、なんと同じ日に二人ともグリーンハウスシミズさんの見学会にお邪魔していたという偶然。

清水 凄く偶然ですね。

奥さま 最終的に他のメーカーさんにも図面提案までしてもらいましたが、この時にはほぼ正解は出ていたということですね。

清水 お一人ともこの新潟市西区が地元なんですよな？

奥さま はい。結婚してから住んでいたマンションも西区。犬の散歩や、夏の趣味、海岸線のドライブ、ふだんの生活に海があることがあまりにも普通だったので、ちょっと離れることが想像できませんでした。

清水 西区出身の方ってそういう方多いですよ。やっぱり海が近く

にあるほうが安心すると。それで土地探しからお手伝いさせてもらいました。ザ・日本の西海岸、ってことをイメージしながら。

ご主人 それで清水さんが提案してくれたプランのタイトルが『West Coast 402』アメリカンなもの、サーフカルチャーが好きなのにはドンピシャでした。

清水 プラン提案をする以前に、ご主人と趣味の話や洋服のこと、好きなお店とか色々話をしていたらピンときたんですよ。きょうこいうのが好きなんだろうなって。

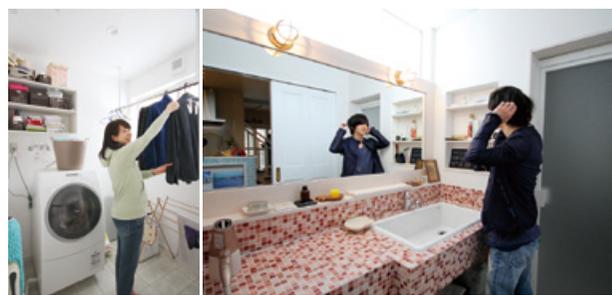
ご主人 あまり細かい要望は出しませんでしたね。将来のために子ども部屋が二つ欲しい、というくらい。それよりも明るくて開放的でとか、そういう話がほとんどでした。グリーンハウスさんならどんなプランを提案してくれるんだろうって、それが楽しかったです。あまり細かいと言いませんでした。奥さま 最終的に数社から図面を提案してもらったんですけど図面で見せられた瞬間はもう驚きました。手書きなんだ！ってそこからまず。

OWNER 感覚が共有できる。手書き図面で確信しました。
—— 施主・里村さん



ご夫婦がコレだ!と確信した手書きの図面

ていねいに手書きで描かれた提案の図面。このタッチや色使いを見て、グリーンハウスシミズなら、好きな感覚を共有できるはずだと確信したそう。



朝日のあたる洗面ルーム

暗いところへと追いやられがちな水回りスペース。採光窓を上部に配し、風の吹き抜ける物干しスペースと、朝の身じたくを自然光でできる洗面スペースが完成しました。

ご主人 他社からの提案もあつて即答できなかったから表情には出しませんでしたけど、図面見て、キターと思って、すごく興奮してたんですよ。

清水 そうだったんですか。だいぶクールを装ってましたね(笑)。私は内心ドキドキしてたんですよ。

奥さま 清水さんの誕生日が近いと聞いていたので、サプライズでお返ししようと思っていたので、少し引つ張っちゃいました。

清水 そういうことだったんですね。ありがとうございます。そこから順調に進んで、出会ってから1年以内に完成しましたね。

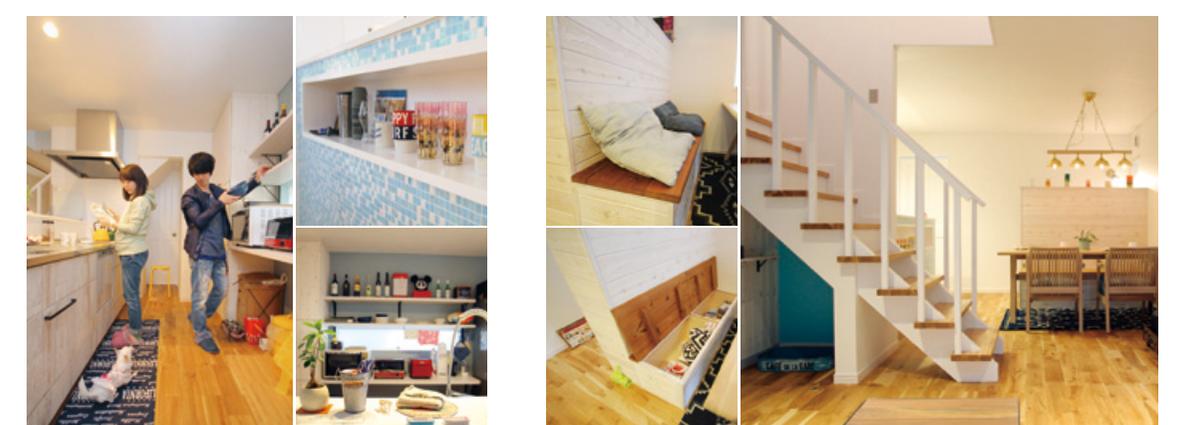
ご主人 そうですね。基本的に清水さんにお任せでしたから。細かい部分よりも、開放感とか、西海岸のテイストとか、その辺がフィットしていたことが重要だったんです。

清水 住んでみていかがですか。

奥さま 洗面、洗濯、キッチン。開放的で使いやすい、機能性が高いことに驚いています。

ご主人 海の近くに暮らしている実感、というか幸せをこの家がさらに教えてくれていますね。外が雪でも嫌じゃない。むしろ、デッキに降る雪とか、好きな景色が増えているくらいです。これからの暮らしがさらに楽しみになりました。

BUILDER 開放感のあるアメリカの西海岸の暮らしをイメージしました。
—— 設計者・清水さん



広々としたオープンキッチン

見えるキッチン収納は、シンクと背中合わせだから食器の片付けがラク。通路はたっぷり広くとってあって、二人で立ってもまだまだ余裕。

開放感を生み出すリビング階段、収納家具

リビングの真ん中に配したリビング階段は、空間を邪魔することなく、役割づけをもたらしい働きをしています。ダイニングの造作収納ベンチも使い勝手が良さそうです。



収納ベンチの背もたれは書斎スペース

ダイニングで使っているオリジナルの収納ベンチ。背もたれ部分は、隣合った趣味スペースの本棚になっています。



念願のたっぷり入るウォークインクローゼット

雰囲気ある寝室の壁面は一部を落ち着いたグリーンに。奥には、念願のウォークインクローゼット。洋服が好きな二人には、スラリと洋服が並んでいる景色もまた愛おしいようです。

INTERVIEW

→ OWNER 施主



里村 洋介さん・奈緒さん・まめちゃん

出会って20年の長いお付き合いだというお二人。ともに西区出身で、ご主人の趣味はスキムボード、愛犬の夏のお散歩コースは海沿い、と、海が生活の一部になっていた。

- ・建てるまでの構想期間：7年
- ・趣味：買い物(洋服・アクセ) / 海 / 犬
- ・好きな本：東野圭吾(夫)、InRed(妻)
- ・好きな食べ物：寿司・肉・ローストカフェのカプチーノ
- ・参考にした物：CRAS・instagram

→ BUILDER プロデューサー



清水裕一さん (株式会社グリーンハウスシミズ 代表)

学生時代を横浜で過ごし、東京の大手デベロッパーに勤務。その後、28歳で興味のあった住宅に携わるため新潟に戻り、2012年9月より代表取締役になる。ハイセンスな審美眼と大胆な空間デザインには定評がある。

- ・携わった期間：10ヶ月
- ・趣味：洋服・ジム
- ・好きな本：奥田英朗
- ・よく聴く音楽：R&B
- ・好きな食べ物：山小屋の焼き鳥
- ・信念：住む人の笑顔を引き出す

→ KEY point

立地と建物に一貫性がある暮らし。

子どもの頃から近くに海がある暮らしをしていた里村さんご夫婦。結婚してからも、趣味も散歩でも、海は生活の一部でした。そこで、ここが日本の西海岸と捉えて、アメリカ西海岸の住まいを参考に、開放的な雰囲気と、木のぬくもりが感じられる、明るい住まいを目指しました。海まで5分という好立地と、開放的なアメリカンな住まいという、一貫性のある暮らしが手に入りました。

所在地：新潟市西区 / 構造：木造在来工法 / 敷地面積：142.59㎡ (43.13坪) / 延床面積：106.82㎡ (32.31坪) ウッドデッキ 7.45㎡ (2.25坪) / 打ち合わせ期間：3ヶ月 / 工事期間：4ヶ月 / 竣工：2016年12月
 <外部仕上げ>
 屋根> ジンカリウム銅板
 外壁> 窯業系サイディング
 <内部仕上げ>
 床> ナラ(無垢)材
 壁> クロス、パイン材
 収納ベンチ、本棚、カップボード、洗面化粧台 / 造作

ITEM

Business tools

移動は愛車のビートル

どデカイ高級車を乗り回すのではなく、小回りが効くコンパクトなドイツ車を選ぶあたりが、実に清水さんらしいチョイス。



人と会って話す。これが仕事の基本

持ち歩く仕事道具を見せて下さいとお願いしたら、思いの外シンプルでした。仕事は、多くの人と会って、話をする、のが基本だからとのこと。スマホはお客さんとLINEなどで参考画像のやりとりした画像でいっぱいでした。



HOBBY

RUN, FISHING and SKIING..etc

アクティブさがアンテナを広げることに

趣味は、旅行、買い物（洋服）、海釣り、体を動かすこと。忙しくても休みを計画的に作って旅行に行ったり、ジムで週2〜3日ほど汗を流したり、とにかくアクティブ。あらゆることへのアンテナを張り巡らせている清水さん。お客さんとの会話の中から、デザインやテイストの好みを汲むのが得意なも領けます。



OFFICE

創立は1965年。50年以上の歴史ある会社

グリーンハウスシズの前身である清水建築工業株式会社は、1965年創立。実は50年以上の歴史がある会社なのです。打合せは基本的に来社してもらってこのオフィスで。「お宅に行ってる打合せはお互い気を使っちゃうでしょ」とスマートさが垣間見えます。

Design for around life
GREEN HOUSE SHIMIZU

「もっと趣味のように 愉しめる家づくりを してもらいたいと思っています」

株式会社グリーンハウスシズ

代表 清水裕一氏



子どもや家族のためにも大事だけど、せっかくの家づくりなんだから、無理だと自分で決め込まないで色々言った方がいいと思います。

大学卒業後、東京で大手デベロッパーに勤めた清水氏、商業施設やマンションの開発に携わったが、時はバブル崩壊…。「本来は建てるどころまで。販売は別の会社がやるんですけど、バブルが弾けてしまったので、接客、契約、ローンの工面、全部やりましたよ。その経験は今も役に立っています。でも、契約が仕事の中心だし、お客さんの意見が反映された住宅を建てられるわけじゃない。ボンヤリと『自分だったらこんな家を作るのにな』というプロデュース欲が湧いてきました。何年か経って、父親である先代の社長から会社を手伝わないかと誘われて、20代の後半、新潟に帰ってきました。当時はまだ和風建築が多かったんですけど、ゆっくり今のスタイルを作っていました」。

グリーンハウスで建てたお客さんの話を聞いていると、かなり「おまかせ」の部分が多いことに驚かされる。それは、ファッション、インテリア、食、アウトドア…、たくさんのアンテナを張っていて、溢れんばかりのアイデアを常にアップデート

しているからだろう。お客さんの要望に応える以上の提案をし続けてきたこれまでの実績が評価されている証といえるのではないだろうか。

「もっと趣味のように愉しめる家づくりをもらいたいと思っています。本当は色々やりたいことがあるけど無理だと思いついて、黙っているご主人様が特に多いです。私がじゃあやってみましょうよって言うと、だんだん目が輝いていく人、結構多いですよ(笑)。自分の趣味を反映した部屋が無い家なんてつまらないじゃないですか。家づくりをもっと私たちと一緒に楽しみましょう」。

清水裕一(しみずゆういち)。1967年新潟市生まれ。新潟明訓高等学校卒業。大学時代を横浜で過ごし、東京の大手デベロッパーに勤務し、マンションの開発から販売に関わる。その後、28歳で興味のあった住宅に携わるため新潟に戻り、実父が社長を務める清水建築工業株式会社に入社。2012年9月より代表取締役になる。「光、風、そして粹…」をキーワードに、ハイセンスな審美眼と大胆な空間デザインに定評がある。